
シェイクスピアは恋をしない

並盛りライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シエイクスピアは恋をしない

【Nコード】

N0063B

【作者名】

並盛りライス

【あらすじ】

シエイクスピアは恋をしない、ついでに勉強もしないのだ。恋も受験も忘れて進む演劇と青春の道。ちなみに恋愛要素はほとんどありません。

第一幕

電気スタンドの光が、白く浮かび上がって、ガラスのコップが汗をかく。

そのスポットライトの中では、主役であるはずなのだけれど、プリマドンナは小さく畏縮してやがて水になる。

鉛筆をボールペンに持ちかえた私は、見事な点数のついた大学の模擬テストの答案を見ていた。

「なんでだ、手応えはあったのに……。」

予想通り、ギリギリに抑えた英語の答案の隣りには、見るも無惨な得意教科であるはずの国語の答案があった。

確に、漢字などの基礎点は満点に近いが、古典や読解で大きくズレた答案を書いていた。

演劇に足を洗って、勉強に力を注いでいただけに、この結果は辛かった。

赤い答案を睨みながら、空っぽになったコップに口を着けた。

「だあゝ!!」

叫びたい衝動に駆られて思わず叫ぶ。

ドフッ

隣りの部屋で寝ている弟が壁を蹴る。

「…すいません。」

言うなりベットにダイブして、枕を抱きこむ。

久しく触っていなかった携帯のディスプレイにはメールのマークが点滅している。

レイカ：夏の公演、大成功しました。アヤ先輩が来れなかったのは残念ですが、今打ち上げてます。

彼女は絵文字を好まない、律儀にも敬語なのは相変わらずだ。

私の所属していた劇団

「晴礼留座」

は少数精鋭の演劇サークルで、春と秋に小劇場、夏と冬には市民会館を借りて公演をする。

一年の時に、先輩に誘われて入り、つい先日までは舞台に参加していた。

しかし、塾や受験勉強の為に長い休部を申し込んである。

本当は、三年の春まではサークルを続けても良いことになっているのだが、親の言う事を聞いて、早めに休部したのだ。

机に向かう気にもなれず、天井を見上げる。

すると、なぜかポスターと目があう。

最後に出演した舞台では、準主役に大抜擢されて、さらにはその作品で賞まで取った。

あの頃は楽しかったなあ、と現実逃避していると突然、電話が鳴った。

一時も過ぎた夜更けに電話してくるヤツと言えばチハル以外には考えられない。

「もしもし、アヤ？」

「私の携帯なんだから、私に決まってるよ。」

醒めた声は演技で、私は内心は嬉しくてしかたがない。

「おお、アヤだ。懐かしい。」

クラスが違つと驚くほど、学校では出会わない。それぞれクラスに友達はいるので、すれちがっても軽い挨拶をする程度だ。

「で、夜中の一時に何の用なの？」

別に怒っている訳ではないのだが、チハルと話すといつもこんな調子になる。

「夏の公演、終わったじゃん。」

夏の公演……。私の知らない舞台。

「ああ、大成功したらしいねえ。おめでとう。」

私は心から、本当に演技ではなく言った。

「うん。」

まあ、そうなんだけど…」

チハルは何故か言葉を濁す。

「新しく入った子でユイちゃんって子がいたじゃん？」

「ああ、いたねえ。結構可愛い感じの…。」

おしとやかで、ちょっとアガリ症だけど頑張り屋。そんな感じの子だ。

「あの子が…『アヤ先輩じゃなきゃヤダ』。』って打ち上げで言って騒いだの。」

チハルのモノマネは上手かった。それだけに、リアルにその情景は浮かんだ。

私のやるハズだった役は、レイカが演じたらしい。

レイカは堅い所はあるが、演技は上手い。たぶん、私が選ぶとしても、あの役はレイカだっただろう。

「そっか、たぶんレイカが頑張り過ぎちゃって、みんなの重荷にな

「っちゃったのかもね。」

ユイだけじゃないだろう、電話をしてきたチハルだって、そう思っているかもしれない。

「さすがアヤだなあ、読み込みが早い。」

「そして、ソレを打ち上げで言っちゃうユイちゃんもねえ…。」

打ち上げは、たぶん悲惨なものだっただろう。そして、レイカにも辛かっただろう。

「だから…」

チハルが真剣な声になる。そういう時は決まって良くない事を言う。

「だから、少しの間だけ戻ってこない？」

真剣で、そして現状が分かだけに、心にチクリと刺さる。

建前という私の防壁にヒビが入り、本音が今にも溢れそうになる。

忘れようとしていた想いが、チハルの言葉で思い出される。

「…お願いします。」

やっとの事で私が言えたのは

「考えとく。でも、本当にそれでいいのかなあ。私が復帰したらレ

イカにとってはもっと辛いだけじゃない？」

建前でもあり、本音でもある。

時計の針は二時を差している。コップの雫が、答案用紙に大きく赤く滲んでいた。

第一幕（後書き）

作者『並盛りライス』は今まで連作ものが続いた例がありません。
果たして汚名返上できますでしょうか…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0063b/>

シェイクスピアは恋をしない

2010年11月24日15時54分発行